

## 事例 中学校と小学校が定期的に協同行うワークショップ研修の例

## 《G中学校の概要》

生徒数 290 人、教職員数 26 人  
学級規模 各学年 3 学級、計 9 学級

## 《H小学校の概要》

生徒数 357 人、教職員数 22 人  
学級規模 各学年 2 学級、計 12 学級

学校・学区域の特色：小中一貫教育校、政令都市、古くからの商業地（商店街）と  
周辺の住宅地からなる学区域  
総合的な学習の時間の主な内容：「地域を愛する心、地域貢献の心と態度をはぐくむ学習」

G中学校は、大都市の商業地域にある中規模校です。近年、自治体から近隣のH小学校との小中一貫教育校の指定を受けましたが、なかなか小・中学校を共通の理念で貫いた教育課程編成が進まず、苦心していました。また、教師間の交流等も停滞していました。

そのよう中、G中学校の校長は、小・中学校一貫教育の重点的な目的を「9年間の連続性のある学力向上策の展開」に加え、「市民性の育成に向けた地域にかかわる学習の推進」とすることをH小学校の校長に提案したのです。協議の結果、「市民性の育成」については、総合的な学習の時間を中心に、社会科、道徳、特別活動を関連させ進めることとなりました。

そして、両校の校長は、小学校と中学校の教師間の交流の活性化を期待して、研究主任、総合的な学習の時間コーディネーターに、交流のしやすさや必然性から、「総合的な学習の時間の単元作り」を内容とした小・中学校の全教師参加によるワークショップ型研修の実現に向けた調整等を行うように命じました。研修会の経過と研修の内容については以下のとおりです。

## 研修会の準備から実施までの経過と研修の内容

| 月 日    | 会 議                           | 協議、検討内容・研修内容   |
|--------|-------------------------------|--|
| 4 / 15 | 第 1 回合同研修会<br>(全体会)           | G中学校を会場として実施する。<br>G中学校研究主任から「市民性のとらえ方」、育てたい生徒・生徒像、推進組織、研修計画等を説明。<br>総合的な学習の時間についての新学習指導要領の理解を行う。<br>自己紹介後、ワークショップのグループづくりを行う。<br>・9グループを編成する。(1グループ5人又は6人)<br>・すべてのグループは、所属学年、校種、経験等の偏りがないように編成する。<br>・各グループに必ずまとめ役となる研究推進委員が入る。                                    |
| 8 / 9  | 第 2 回合同研修会<br>「地域素材発掘ワークショップ」 | H小学校を会場として実施する。<br>ワークショップの進行は外部講師(大学教授)を招聘する。<br>グループごとにワークショップを行う。2つの教室を使用する。<br>各グループは、地域マップを広げ、「市民性」をはぐくむための地域素材について話し合うとともに、その素材をどの学年の何の学習活動で活用できるか、具体的な単元計画を作成し、プレゼンにまとめる。<br>資料完成後、全グループが多目的室に集まり、報告を行う。<br>研修会終了後、研究推進委員が集まり、本日のワークショップの振り返りと次回の内容について協議を行う。 |
| 11 / 8 | 第 3 回合同研修会<br>「授業研究ワークショップ」   | G中学校を会場として実施する。<br>「地域の素材発掘ワークショップ」で発表された学習活動についての研究授業を実施する。<br>研究授業終了後、各グループに分かれ、本日の研究授業の単元・学習活動をさらによくするための改善方法・内容について話し合う。<br>各グループでの話し合い終了後、各グループから報告を行う。<br>今回も研修会終了後、研究推進委員が集まり、本日のワークショップの振り返りと次回の内容について協議を行う。   |
| 2 / 8  | 第 4 回合同研修会<br>「授業研究ワークショップ」   | H小学校を会場として実施する。<br>「授業研究ワークショップ」とほぼ同じ進め方で実施する。   |

### 第3節 授業時数の確保と弾力的な運用の実践事例

総合的な学習の時間では、地域の伝統的な行事や祭と探究的な学習を結び付けて行うダイナミックな学習単元や連続して数日間行う職場体験などが短期間に集中的に行われる場合がある。

このような学習活動を実施するためには、事前の調べ学習の時期に、1単位時間50分を70分などに変更する場合もある。また、1単位時間の長さを変えずに、通常、1週あたり2時間の授業数を4時間に増やす期間を年間指導計画において設定する場合もある。さらに、職場体験活動など、5日間連続、合計30時間の総合的な学習の時間を集中的に実施することなどもある。

各学校においては、目的に応じた弾力化な単位時間や授業時数の運用による総合的な学習の時間を教育計画の中に適切に配当する必要がある。

#### 事例 目的に応じた単位時間等の弾力化の例

I中学校は、半農半漁の町にある全6学級の小規模校です。

美しい海岸が学校から徒歩で10分程の所にあることから、各学年、総合的な学習の時間の主な学習活動をこの海岸を学習のフィールドとした「環境教育」としています。

第1学年の1学期には、観光シーズンに訪れる人たちに、ゴミの持ち帰りなどの意識をもってもらうことを目的の1つとして、海岸の生物や豊かな自然を調べ、「海岸自然パンフレット(海岸パンフ)」を作り、観光客に配布する学習活動を例年行っています。

海岸での調査活動や学校での探究的な学習の時間を確保するために、1学期は水曜日の5時間目を75分とする単位時間の弾力化を図っています。

また、木曜日の1校時に総合的な学習の時間を設定し、水曜日は校外での学習、木曜日は、校内で水曜日の調査結果等をまとめるように位置付けました。

さらに、水曜日については、通常は5校時ですが、校外での体験学習等をまとめて実施する時期には、6校時目を加えて2時間続きの授業とすることにしました。

10月、11月については、合唱祭との関係で水曜日の5校時は特別活動の時間と設定し、木曜日の1校時のみを総合的な学習の時間にしています。

#### I中学校、第1学年の総合的な学習の時間

##### 《学習内容と配当授業時数》

| 主な学習内容 |  | 月  | 授業時間 | 32時間   |
|--------|--|----|------|--------|
| 1学期    | 海岸自然保護プロジェクト<br>海岸パンフ作りー<br>(現場視察による課題発見 探究的な学習 海岸パンフ作成) | 4  | 8.5  |        |
|        |  | 5  | 8.5  |        |
|        |  | 6  | 10   |        |
|        |  | 7  | 5    |        |
|        | 海岸パンフを海岸で配布  | 8  |      |        |
| 2学期    | 海岸パンフ掲載内容報告会   | 9  | 9    | 12.5時間 |
|        | エコ商品を企画しよう<br>(課題発見 探究的な学習 まとめ《論文》)                      | 10 | 5    |        |
|        |  | 11 | 3    |        |
|        |  | 12 | 8.5  |        |
| 3学期    | エコ商品企画報告会<br>職業体験に向けて<br>(2学年職場体験報告会参加 自分の就きたい職業調べ)      | 1  | 6    | 70時間   |
|        |  | 2  | 6.5  |        |
|        |  | 3  | 0    |        |
| 計      |  |    |      |        |

##### 《5月の2週目の水曜日・木曜日授業》

|     |  |
|-----|--|
| 水曜日 | 5校時(1:30~2:45)75分授業<br>1:30(校庭集合、学年全体で学校発)<br>1:40(海岸着、グループ別調査活動開始)<br>調査活動 2:30(調査終了、全体集合)<br>2:40(学校着、学年活動) 2:45(学年解散) |
| 木曜日 | 1校時(8:40~9:30)通常授業<br>8:40(A組:多目的室、B組:学校図書館で授業開始) グループ別調べ学習<br>9:30(授業終了)  |

- ・現地での調査等の活動は移動の時間以外に、最低、50分は欲しいです。
- ・今後、じっくり調査をしたい旨、先生に伝えました。翌週の水曜日、先生が2時間連続授業にしてくれました。
- ・水曜日に海岸で調べたことを自宅でまとめました。翌日の総合の時間で仲間と意見交換して、新たな課題に気が付きました。



事例 1年間を見通した弾力的な授業時数の例

大都市、下町地域に位置する全8学級の中規模校のJ中学校は、「地域のことを見つめ、地域の未来を考える」を全体テーマとした総合的な学習の時間「地域未来」を設定し、精力的に地域についての調査活動、地域貢献にかかわる体験学習等を実施しています。

各学年の年間指導計画においては、地域行事等とのかかわりにより、地域での体験学習の実施時期、探究的な学習の実施時間等が大きく異なっています。

第1学年は、職場体験のために3学期に30時間が設定されています。第2学年は、7月に実施される地域の伝統ある祭祀についての研究と体験により、第1学期の授業時間を多く設定しています。

そして、第3学年は、3年生「ふるさと再生計画」(70時間)に取り組んでいます。中学生になると、地域とのかかわりは小学校の時よりも少なくなります。そのような中、本単元は、自分の「ふるさと」を大切に思い、未来を担う一市民としての自覚を深めさせることを大きなねらいとして、第1、2学年での探究的な学習等を通して把握した地域の課題をもとに論文作成と地域貢献学習を進めていきます。3年間の総合的な学習の時間を2学期までにまとめた論文「私のふるさと創造計画」の同級生・下級生への報告会と4日間の地域貢献活動を行うために、3学期に授業時間を多く設定しています。

2学期は、体験活動が多いことから、固定時間割を週3時間に設定し、1学期と3学期の固定時間割は、週2時間として計画し、年間70時間の総合的な学習の時間の時数を確保しています。

|                            | 第1学年   |    | 第2学年  |    | 第3学年  |    |
|----------------------------|--|----|---|----|---|----|
| 全体テーマ「地域のことを見つめ、地域の未来を考える」 |  |    |   |    |   |    |
| 主題                         | 「地域の今を学ぶ 街の様子と人々の生活」                                     |    | 「ふるさと再発見 伝統文化を中心に」                                |    | 「ふるさと再生 今、自分ができること」                         |    |
|                            | 学年ガイダンス  | 2  | 学年ガイダンス   | 2  | 学年ガイダンス                                     | 2  |
| 1学期                        | 地域調査活動<br>地域人材とともに地域を調べる学習活動と課題設定                        | 12 | 地域の伝統行事(祭祀)についての調査活動<br>運営ボランティア参加<br>(2h×6日=12h) | 28 | 日本の伝統文化研究論文「私のふるさと創造計画」執筆のための情報収集           | 12 |
| 夏休み                        | 個人研究   |    | 個人研究  |    | 論文テーマに基づく情報収集と論文個別指導                        | 8  |
| 2学期                        | グループ別課題追究<br>探求的な学習と発表を課題を同じにする生徒がグループを組み行う<br>職業についての調査 | 18 | 地域の伝統行事(祭祀)保護者、地域の方を招いての報告会の実施                    | 22 | 「私のふるさと創造計画」論文作成に向けた情報収集と執筆                 | 18 |
| 3学期                        | 職場体験先の学習<br>職場体験<br>(6h×5日=30h)<br>職場体験まとめと発表            | 38 | 東京の伝統文化についての探究活動と関西文化との違いの考察講座                    | 18 | 地域貢献活動準備<br>地域貢献活動(20h)<br>論文報告会準備<br>論文報告会 | 30 |

3学期の地域貢献活動は、卒業を間近に控えた1日4時間、5日間で設定しました。地域貢献活動の内容は、論文のテーマに基づき、一人一人の生徒が主体的に選択しました。実施にあたっては、総合的な学習の時間コーディネーターが意欲的に行政、町内会等と調整を図りました。  
論文報告会は、「第一部：後輩たちに対して論文発表」「第二部：お世話になった方々への論文発表」「第三部：学区内の小学6年生への(論文を分かりやすい言葉で)発表」という3部構成で実施しました。

## 第4節 学習環境の整備の実践事例

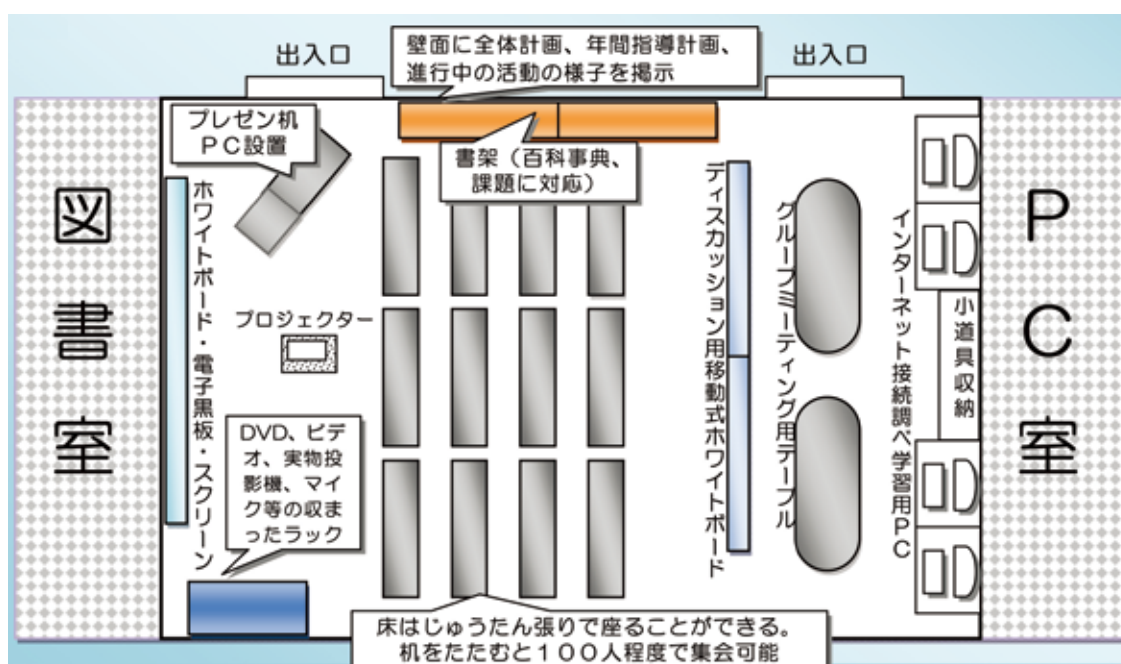
横断的・総合的な学習や探究的な学習に生徒が意欲的に取り組み、そこでの学習を深めていくには、学習環境が適切に整えられていなければならない。

総合的な学習の時間では、ねらいや学習活動等が各学校で異なるために、一律に同様の環境を整備してもうまくいかない場合が多い。まず、各学校が総合的な学習のねらいを実現するために必要な学習環境を明らかにし、それに向けた環境整備の工夫や努力をどのように行うかが求められる。

### 事例 総合的な学習の時間に使用することを主目的として余裕教室を整備した例

K中学校は、各学年2学級の小規模校です。学級数減による空き教室が生じたこと、校舎の一部改修が行われたのをきっかけに、図書室とパソコン（以下、PC）室の間に総合的な学習の時間で主に使用することを想定した「多目的室」を整備することとなりました。この多目的室の整備は、「総合的な学習の時間推進委員会」が自校の総合的な学習の時間の学習内容等を考えデザインしました。

整備にあたっては、床カーペット張り、ICT 機器整備のための予算、一部 PC を PC 室から移動するための予算を教育委員会から配当された他は、校内にある備品、教材を集める等の工夫をしました。



事例 多様な学習活動に応じたオープンスペースを有効活用した例

L中学校は、各学年2学級の小規模校です。12年前に校舎の改築が行われ、2階部分、3階部分の教室前に広場のようなオープンスペースができました。しかし、そのスペースは、学年集会や部活動の室内練習で活用されることがほとんどで、授業では、使用されることがありませんでした。

前任校で総合的な学習の時間コーディネーターであった教頭は、このスペースを総合的な学習の時間に有効活用できると考えました。そして、着任当初の4月に当該校の総合的な学習の時間担当である第1学年の教諭に、自分自身が考えたオープンスペース活用案を、総合的な学習の時間推進委員会で検討し、各学年の学習活動の内容に応じて、実践してみるよう働きかけました。同時に事務職員に、オープンスペースで使用するミーティング用の机、椅子についての購入を相談しました。

推進委員会では、活用の仕方等について、様々なアイデアが出された他、各学年で学習活動の特性を踏まえ、オープンスペースを積極的に活用していくことになりました。

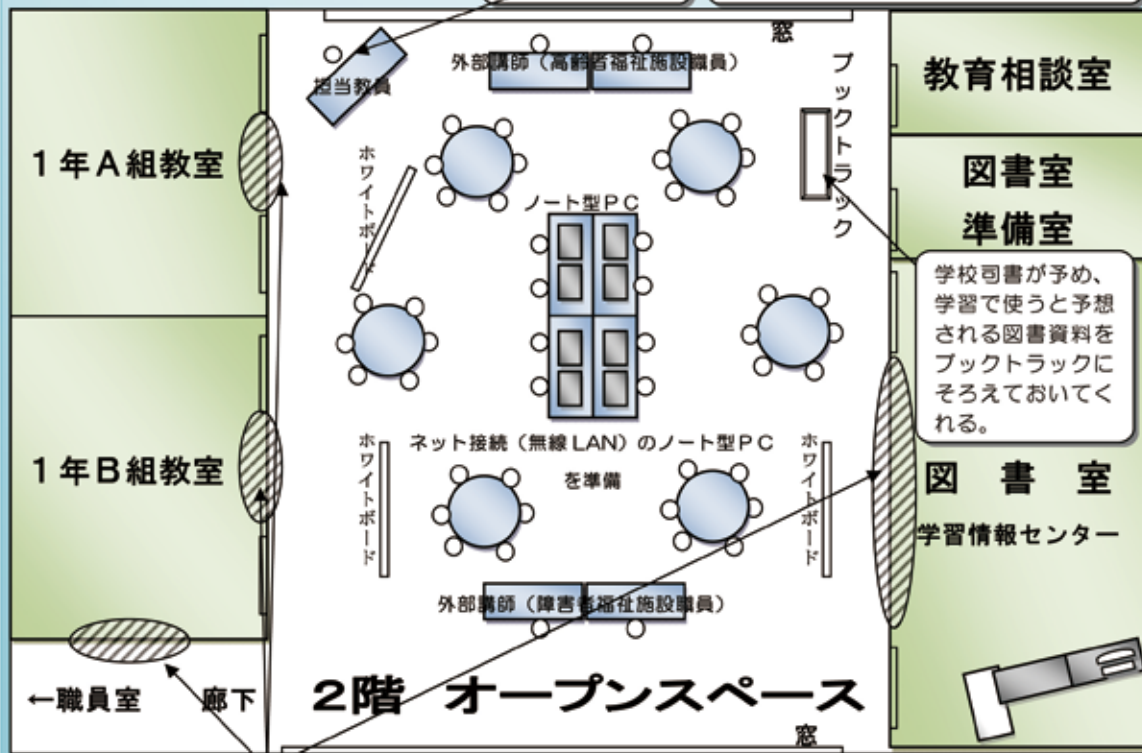
ここでは、第1学年の「福祉」についての学習活動における活用事例を紹介します。

第1学年、福祉についての調べ学習で活用した事例

本学習活動は、オープンスペースや教室等を有効活用したグループ単位による調べ学習です。生徒は、招いた外部講師に質問をしたり、図書室で調べたりしながら学習を進めます。

担当教員。時間管理など、生徒の学習活動全体を統括します。

長机は、折りたたみ式の机です。全部で30台準備しており、2学級全体でゼミ形式の学習もできます。(円形のグループ用の机は常時設置。)



は、「新聞」「模造紙でのまとめ」などの学習成果や研究過程の野外調査の様子などを壁面掲示している場所である。成果の共有は、生徒の興味・関心を引き出したり、学習を振り返ったりする上で効果的です。

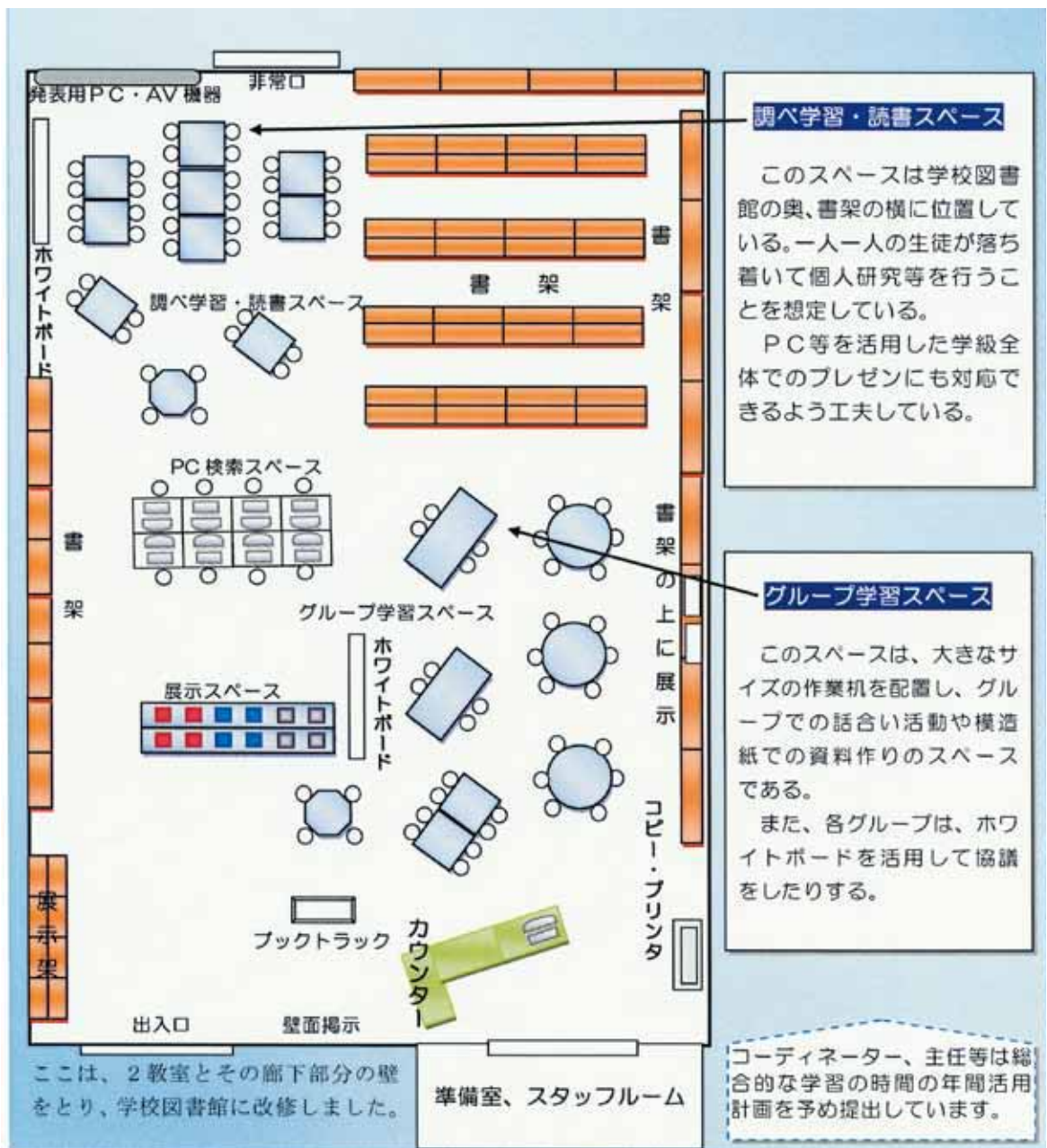
オープンスペースのよさは、学習活動の内容により、教室レイアウト等が自由に変えられるところにあります。L中学校はPC室が3階のため、学習時に、2階のオープンスペースには、無線LANに接続したPC等が準備されます。また、プロジェクター投影用のスクリーンも常設されています。

事例 学習・情報センターとしての学校図書館の例

総合的な学習の時間を進める中、課題を解決したり、学習の中で疑問が生じたりしたとき、必要な情報を収集し活用できる学校図書館の環境を整えておくことは、問題の解決や探究活動を充実させるために大切なことです。

M中学校は、20学級を越える大規模校です。この規模では、総合的な学習の時間等の調べ学習で学校図書館を活用する際も、2学級が入れるようなレイアウト等が必要になります。

M中学校では、校舎の改修工事を進める際、学校図書館を整備する要望を出し、「学習・情報センター」としての機能が充実した学校図書館となりました。館内には、落ち着いて個別学習ができる「調べ学習・読書スペース」とグループごとの話し合いや作業をするための「グループ学習スペース」を作りました。



## 第5節 外部との連携の構築の実践事例

総合的な学習の時間では、地域の素材や地域の学習環境を積極的に活用することが期待されており、その実現のためには、保護者や地域の人々、専門家をはじめとした外部の人々、社会教育施設や社会教育関係団体等との連携・協力が欠かせない。

外部連携に当たっては、管理職、総合的な学習の時間コーディネーター等の担当者が中心となり、外部人材等と連絡・調整の機会を設定することが重要である。しかし、総合的な学習の時間コーディネーターが代わることで、それまで築き上げてきた結び付きが薄れてしまう場合も想定される。そのようなことが起こらないよう、校内に外部連携を効率的・継続的に行うためのシステムの準備が必要である。ここでは、外部連携のためのシステムや外部連携を適切に行うための配慮事項を記す。

### 外部連携のための5つの留意点

#### 日常的なかかわり

- ・協力的なシステムを構築するためには、日頃から外部人材などと適切にかかわろうとする姿勢をもつことが大切である。

#### 担当者や組織の設置

- ・校務分掌上に地域連携部などを設置したり、外部と連携するための窓口となる担当者を置いたりする。
- ・地域との連絡協議会などの組織を設置することも考えられる。

#### 教育資源のリスト

- ・学校外の教育資源を活用するために総合的な学習の時間に協力可能な人材や施設などに関するリスト（人材・施設バンク）を作成する。

#### 適切な打合せの実施

- ・外部人材に対して、適切な対応を心掛けるとともに、授業のねらいを明確にし、教師と連携先との役割分担を事前に確認するなど、十分な打合せをする必要がある。

#### 学習成果の伝達

- ・学校公開日や学習発表会などの開催を通知したり、学校だよりの配布などをしたりして、保護者や地域の人々に総合的な学習の時間の成果を発表する場と機会を設ける。

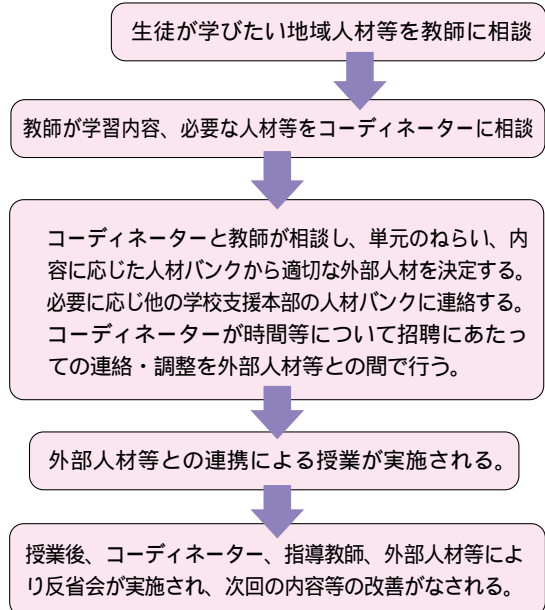
### 事例 学校支援本部による地域人材バンクの例

平成20年、大都市にあるN中学校には、保護者、地域の人々により学校の教育活動全般を支援する組織「学校支援本部」が設立されました。

学校支援本部には、学校と地域との連携した活動を中心となって推進する学校支援コーディネーターが置かれました。現在、そのコーディネーターを中心に、学校の教育を支える人材の募集、リスト化（人材バンク化）、研修、派遣事務等が行われています。

このことにより、教師、生徒は、総合的な学習の時間等に必要の人材等をコーディネーターに相談することで効率的に活用できるようになりました。学校支援本部は、区内の多くの学校で設置され、ネットワーク化されています。そして、人材バンク間の相互紹介がされています。

### 総合的な学習時間における「学校支援コーディネーター」活用の流れ



## 事例 総合的な学習の時間が地域コミュニティを再生した例

大都市部の〇中学校は、新興住宅地に位置する学校としては珍しく 1.8 ヘクタールの学校林をもつ小規模校です。昭和 29 年に学校林が地域住民の力で造林されて以来、その学校林は、体験学習の場として活用されてきました。珍しい動植物が生息することから、理科授業における観察や秋に生徒と保護者等により収穫される栗の実を販売するなどの取組が当時よりなされていました。

〇中学校は総合的な学習の時間が本格的に開始された平成 14 年度から、この学校林と学校周辺の自然環境を学習の場とする環境教育を総合的な学習の時間の中心に据えてきました。その後、総合的な学習の時間にかかわる校内研究が進められる中、この学校林は「豊かな心をはぐくむ場」「問題解決能力をはぐくむ場」「環境問題を考え、行動を始める場」「地域コミュニティづくりを進める場」として、その存在意義が明確にされ、総合的な学習の時間での意図的・計画的に活用されるようになっていきます。

学校林の維持・管理については、古くからの住民や卒業生等の支援により支えられてきましたが、近年、新興住宅地として発展する中で、新しい住民は、学校の教育活動ばかりでなく、地域における行事等への参加についても、消極的な面が見られるようになっていました。

しかし、総合的な学習の時間において、生徒による学校林での活動が充実するに従い、生徒たちのために、学校林を保護していく活動を地域全体で活性化させていこうという声が保護者 OB を中心に強くなり、古くからの住民、新しい住民が手を携えて、学校林の「自然保護」「下草刈り」「樹木剪定」を行うようになってきました。当時の校長は、「学校林での学校、保護者、地域住民による連携は、学校を媒体とした町づくりにつながる。」という意識を教師にも伝え、総合的な学習にかかわる校内研究を推進しました。教師は、研究主任を中心に、地域貢献を視野に入れた研究を行いました。

現在、青少年育成団体と総合的な学習の時間コーディネーターを中心に、毎年 2 回の生徒、教師、保護者、新旧地域住民による学校林の下草刈りが実施されるようになっていきます。また、学校林保護を主な活動内容とする NPO が設立され、毎週 1 度、学校林の自然の維持・管理のための活動をするようになっていきます。この NPO は定期的に総合的な学習の時間の講師として授業に参加する他、地域住民対象「自然観察会」を毎月 1 回開催するようになっていきます。

その他、学区内にある小学校、幼稚園、保育園、福祉施設などが季節の自然等を味わうためにこの学校林を訪れるようになりました。学校林の案内やそこでの体験学習等の講師に〇中学校の生徒がなる場合もありました。このような幼児期、小学校期における学校林での自然に触れる原体験が、学校林への愛着心や自然を守りたい、発展させたいという気持ちの芽生えに繋がり、中学校での総合的な学習の時間の学習意欲の高揚に結びつくものと考えます。また、将来、自分自身の郷土やコミュニティを自らの力で守ろうという態度につながっていくことも期待されます。

今、学校林での総合的な学習の時間の授業は、生徒たちの探究活動等の時間であると同時に、その学習を支援する NPO や青少年育成団体等を核とするネットワークを構築し、地域コミュニティ再生の場となっています。〇中学校での総合的な学習の時間が、町づくりに果たした役割は大変大きいと言えます。

